

多摩川先人館

[先人No.6] 奥多摩の自然に心をふるわせた日本画壇の巨匠

川合玉堂 かわいぎょくどう (1873~1957)

明治・大正・昭和と3つの時代にわたって活躍した川合玉堂（かわいぎょくどう）は、フランスのレジオン・ドヌール勲章や、文化勲章を受章した、日本画壇の巨匠と言われる日本画家です。自然を愛した玉堂は、若い頃から頻繁に奥多摩へ足を運び、72歳から84歳で亡くなるまでの12年間を青梅市御岳に暮らして絵を描き続けました。



川合玉堂

幼少より才能を開花させた玉堂

川合玉堂・本名芳三郎（よしぎぶろう）は、明治6(1873)年11月24日、愛知県栗原郡外割田村（はくりぐんそとわりでんむら・現在の一宮市木曾川町）で筆墨紙商（ひつぱくししょう）を営む、父・勘七、母・かな女の長男として生まれました。

幼年時代を岐阜で過ごした玉堂は、岐阜尋常高等小学校へ通う12歳頃から絵に親しむようになりました。

晩年のインタビューに「岐阜での少年時代は、父親と山で景色を眺めながらお菓子や弁当を食べるのが楽しみで、その頃から自然が大好きだった。」と語っているように、すでにこの頃には、生涯にわたって自然を愛し描き続けた画家・川合玉堂の基礎が築かれていたのでしょうか。

高等小学校を卒業した明治20(1887)年の9月、京都の日本画家・望月玉泉[*1]の門に入って「玉舟」の号を与えられた玉堂は、模写や写生などに打ち込みました。そして早くも3年後の明治23(1890)年、上野公園で行われた明治政府主催の「第3回内国勸業博覧会（ないこくかんぎょうはくらんかい）」に出品した「春溪群猿図（しゅんけいぐんえんず）」と「秋溪群鹿図（しゅうけいぐんかず）」が入選します。

そしてこの時、師・玉泉の"玉"と、外祖父・竹堂の"堂"をとって「玉堂」と名を改め、幸野樸嶺[*2]が開く「大成義会」に入りました。

数々の受章、そして奥多摩との出会い

改名後、玉堂の私生活は、両親の相次ぐ死去、結婚、そして長男の出生と、様々な出来事が起きますが、画家としても大きな転機を迎えます。明治28(1895)年、「第4回内国勸業博覧会」で橋本雅邦[*3]の作品に出会い、東京へ上京するのです。

雅邦の門下に入り、麴町に住み始めた23歳の玉堂は、この頃初めて奥多摩を訪れています。そして、奥多摩の山々や溪谷に「ふるいつく程いい」と感激して、写生に通い詰めるようになりました。

明治33(1900)年頃開いた私塾「長流画塾」も門下生が増え、名実ともに認められるようになった玉堂は、次々と博覧会や展覧会の審査委員を務めました。更に昭和6(1931)年には、ナポレオン1世によって制定されたフランスの「レジオン・ドヌール勲章 (Legion d'honneur)」を、イタリア皇帝からは「グランオフィシエー・クーロンヌ勲章」を、そして昭和15(1940)年には「文化勲章」を受章するのです。

奥多摩への転居

しかしこの頃の日本は、戦局の悪化と共に米軍の空襲が頻繁になっていました。そのため玉堂は、昭和19(1944)年7月に東京都下西多摩郡三田村町御岳（現在の青梅市御岳）へ、12月には古里村白丸（現在の奥多摩町白丸）へ移り、疎開生活を送っていました。

ところが翌年5月、牛込若宮町（現在の新宿区若宮町）の自宅が空襲によって焼失、以後84歳で亡くなるまでの12年間を、三田村御岳に建てた自宅「偶庵（ぐあん）」とアトリエ「随軒（ずいけん）」で過ごし、自らも「偶庵」と称するのです。



御岳での玉堂は、朝まだ暗いうちに起きだして散歩に出かけるのが日課で、戻ると自宅の玄関に「午前不在」という張り紙をしてアトリエに籠もったのだそうです。

そうして残した作品は多岐にわたり、昭和22(1947)年からの1年ごとに歌集「多摩の草屋」を3巻、昭和28(1953)年に4巻を刊行、昭和24(1949)年には奥多摩の風景を描いた「古駅の秋」を、昭和25(1950)年には御岳山の日の出を描いた「黎明（れいめい）」を、昭和28(1953)年には奥多摩の栈道を描いた「溪山紅葉（けいざんこうよう）」を、そして昭和29(1954)年には俚歌「御岳柚唄」（りか「みたけそまうた」）を作詞しています。また玉堂は、17歳から亡くなるまでの66年間「鶴飼い（うかい）」をテーマとした絵を描き続け、500点余りもの作品を残しています。

昭和28(1953)年に一時体調を崩しますが回復、昭和30(1955)年10月には名誉都民に、翌月には青梅市の名誉市民に選ばれました。しかし2年後の昭和32(1957)年2月下旬、心臓喘息病（しんぞうぜんそくびょう）を起こした玉堂は一時回復に向かいましたが、6月30日ついに84年間の涯を閉じました。

年号	西暦	月.日	年齢	略歴
明治6	1873	11.24	0	愛知県葉栗郡外割田村に生まれる。
明治20	1887	春	14	岐阜尋常高等小学校を卒業。
		9		京都の望月玉泉の門に入り「玉舟」の号を与えられる。
明治23	1890		17	「勸業博覧会」出品にあたり「玉堂」と改め、作品は入選。
		11		幸野椋嶺の塾「大成義会」に入る。
明治24	1891	10.28	18	岐阜・愛知県を襲った美濃地震によって父死亡。母と共に京都へ出る。

明治26	1893	4	20	母、急性肝炎のため死亡。親戚の大洞の次女富子と結婚。
明治28	1895	9	22	長男真一誕生。内国博覧会で橋本雅邦の作品と出会う。
明治29	1896	4	23	上京し、雅邦の門に入る。麴町に住む。
明治31	1898	10	25	「日本美術院」創立、雅邦に従いこれに加わる。
明治33	1900	2	27	次男修二誕生。私塾「長流画塾」盛んになる。
明治34	1901		28	牛込若宮町に転居。
明治35	1902		29	三男圭三誕生。
明治39	1906		33	五二共進会審査員に任命。長女国子誕生。
明治40	1907	3	34	「東京勸業博覧会」の審査官、「文展」審査官に任命。「二日月」東京勸業博覧会で一等賞を受賞。
明治43	1910	9.8	37	イタリア万国博覧会監査委員に任命。
大正3	1914		41	大正博覧会審査員に任命。
大正4	1915	5.19	42	東京美術学校教授を拝命。
		10		牛込若宮町に転居。
大正6	1917	6	44	帝室技芸員を拝命。
大正7	1918		45	東京美術学校日本画科主任に任命。
大正8	1919	9	46	帝国美術院会員になる。
大正9	1920	10	47	三男死亡。
		12		高等官三等に任命。
大正11	1922	5	49	第1回朝鮮美術展覧会の審査員として朝鮮各地を巡遊。
昭和2	1927	3	54	従四位に叙せられる。
昭和3	1928	1	55	昭和天皇御即位御大典用品として「悠紀地方風俗屏風」の揮毫を拝命。
		11		大礼記念章を授与。
昭和4	1929	9	56	勅人官待遇。
		10		勲四等端宝章を賜る。
昭和6	1931		58	フランス「レジョン・ドヌール勲章」拝受。
		6		イタリア皇帝から「グランオフィシエー・クーロンヌ勲章」を拝受。
昭和7	1932	10	59	正四位に叙せられる。
昭和8	1933	10	60	ドイツ政府より「赤十字第一等名誉章」を送られる。
昭和10	1935	6	62	帝国美術院会員に任命。
		11		勲三等端宝章を賜る。
昭和11	1936	6	63	東京美術学校教授および帝国美術院会員の辞表を提出。
昭和15	1940	11.10	67	紀元2600年式典当日「文化勲章」を受ける。
昭和19	1944	7	71	東京都下西多摩郡三田村町御岳に疎開。
		12		古里村白丸へ移転。
昭和20	1945	5	72	牛込若宮町の自宅焼失。
		12		三田村御岳に移り「偶庵」と称する。
昭和28	1953	11	80	病を得て療養。
昭和29	1954	3	81	病気回復。
昭和30	1955	10	82	名誉都民に推薦される。
		11		青梅名誉市民に推薦される。
昭和32	1957	2	84	心臓喘息病を起し療養。一時回復に向かう。
		6.30		再び悪化し逝去。勲一等旭日大綬章を賜る。
昭和36	1957	5	84	「玉堂美術館」開館。

玉堂がついの住処に選んだ青梅市御岳の溪谷には「玉堂美術館」があります。この美術館には、15歳頃の写生帳や、84歳の絶筆までと幅広い玉堂の作品や、画室だった「偶庵」などがそのままの姿で展示されています。



玉堂美術館

- 住所 . . . 東京都青梅市御岳1-75
 - TEL. . . . 0428-78-8335
 - 交通 . . . JR青梅線「御岳駅」より徒歩10分
-

*1 望月玉泉 (もちづきぎょくせん)

- . . . 日本画家。望月派の4代目。幸野樗嶺らと京都府画学校を設立し、教員として指導にあたるほか、パリ万国博覧会や内国勸業博覧会等、国内外の博覧会で活躍。風趣ある写実的な画風を確立した。帝室技芸員。

*2 幸野樗嶺 (こうのばいれい)

- . . . 幕末・明治の四条派の画家。京都府画学校教師となり後進の指導に尽力。京都青年絵画会・京都私立絵画研究会を組織、新日本画発展に尽力する。帝室技芸員。

*3 橋本雅邦 (はしもとがほう)

- . . . 明治期の日本画家。同門の狩野芳崖とともに、日本画の「近世」と「近代」を橋渡しする位置にいる画家。洋画の技法を取り入れ、明治期の日本画の革新に貢献した。